

論
評

安永武人氏の「戦時下の文学」(二—二)

に就いて

深 江 浩

たその側面だけを誇大視して、これがもっていた大切な方法的試みをも同時に清算してしまふ傾向が強い中で、国民文学論の最も大切な核心を生かしたという意味でも、この論文は貴重な意味をもっている。

もちろん、今日の文学状況を、たんなる文学復興期との類比においてではなく、その固有性において考えるためには、国民文学論自身もういちど否定をくりぬけてこなければどうにもならないと思う。これは安永氏だけでなく私たちすべての課題であり、いわゆる日本文学協会の危機なるものも、ここの克服のしかたにかんにかかわってしよう。

一

安永武人氏の「戦時下の文学」(二—三)〔同志社国文学〕一—三号所載)を読んだ。これは氏の苦渋な戦時下体験と今日の文学状況への批判を重ね合わせながら、プロレタリア文学退潮後に迎えた、いわゆる文芸復興期から、急速に文学が戦争の奴隷となつてゆく過程を追求しようとされたものである。その際、大切なことは、文学固有の次元でこの文学喪失のいきさつを追求しようとしたことであつて、その点で、この論文は歴史・社会学的方法の弱点を克服しようとした貴重な試みのひとつである

といえる。もちろん、いうまでもないことであるが、歴史・社会学的方法を克服するということは歴史、社会を捨象して普遍的な文芸性だけを追求することではない。歴史、社会の規定性と文学の芸術性との弁証法を追求するということなくしてはなるまい。実はこうした試みは国民文学論の時に意識的になされたのであり、特に丸山静氏の理論的業績の意義もここにあつた。安永氏の方法も、このような意味での国民文学論の成果の上にはっきり立っている。国民文学論が政治主義的方向にゆがめられ、ま

安永氏は「ひたむきな内心のたたい、がさまざまな形でちりばめられ、それを包む一切が空し」かつた」(一号、七四頁)

という痛切な戦時下体験をかみしめながら、「文学が文学でなくなつてゆく——同時に人間が人間でなくなつてゆく過程をあきらかにすることは、いわゆる『文芸復興期』の文学が頽廃の花を咲かせた季節と、文学的出発の時期とがかさなりあつていたわたしにとって回避できない作業であるとともに、こんにちの文学の問題としても必要であるとおもう」(二号、七四頁)という問題意識でもって、戦時下の文学を考へようとしていられる。ここには、氏自身の痛切な個人的体験の意味を執拗に問いつづけながら、それを普遍的な問題として、また今日のアクチュアルな問題として昇華させようとする姿勢がうかがわれ、職人的な文学研究が益々多くなつてくる最近の傾向をみるにつけ、文学研究者としてのまっとうな姿勢を示されたものとしてまず敬意を表したい。

さて、以上のような問題意識でもって、

まず、「その一」では火野葦平の作品が主としてとりあげられ、「その二」ではこれと対比する形で石川達三の「生きてゐる兵隊」が主にとりあげられる。「その三」では朝鮮の作家の作品がとりあげられているのであるが、「その一」と「その二」でいちおうのまとまりを示しているのが、ここではこの二篇を中心に論じ、「その三」は今後書きつがれてゆく諸篇を含めて、全体の文脈の中でその位置を確かめながら改めてとりあげたい。

そこで、まず「その一」であるが、ここでは「麦と兵隊」の執筆動機がさまざまな資料を用いてまず検討されている。その結果、安永氏は、火野の中に、「壮大なる戦争」「偉大なる現実」という戦争に対する想念と、その戦争の中で「盲目」状態にあつたという矛盾が、矛盾とは意識されないで同居していたことを指摘され、そうした意識でもって、「兵隊の惨苦と犠牲」に對

する感動を定着させようとしたのがこの作品なのだといわれる。つまりそのことは、戦争目的は不問にしておいて、「当面する一作戰、一戦鬪の目標」しか問題にせず、「こざかしい理屈をもてあそばないで黙々と行動する日本兵士の『美しさ』への感動」が作者の創作衝動となつたということなのである。

ここで、安永氏は戦争目的には盲目でありながら、この戦争を「壮大」とか「偉大」とかとしてうけ入れられる作家の意識、そして、むしろ戦争目的とか何とかとこざかしい理屈はもてあそばないで、黙々と行動する兵士を美しいと感動する、そのような感受性の質がどうして生れたかを、歴史的に把握しようとする。それはつまるところ、昭和初年以來着々と進められてきたファシズム支配体制の誘導、弾圧と、家族制度的な論理と心情との相互補強作用によって生み出されたものである

と説明される。火野も含めて、多くの戦争文学の作家が感動するひとつの場面は、戦場における軍隊内部の家族主義的つながりであり、批評家もこれを「人間味」とか「ヒューマニズム」とか「伝統的精神」とかいって肯定的に評価するのであるが、

メージからして、あるまじき行為として映ったからで、それ以上のもではない。その証拠に、「土と兵隊」に、戦後、作者が書き加えた捕虜銃殺の場面をみても、「皇軍」そのものへの疑惑へと進まなかった事がわかるといわれる。

な精神に徹しようとせず、むしろ求道的に軍隊たるうとしたことの中には、「かれがインテリであるがゆえに、庶民出身兵にたいして、心身ともに劣弱であるといううしろめたさ」（一号、八五頁）があつたということ。それが「思弁的煩雑さをきりすて、庶民出身兵のもつ単純明快な行動原理とたくましい行動力へちかづこうとするせない努力」（二号、八六頁）を生み出すのであって、実はこのようにして、火野は

いし安永氏は指摘される。したがって、火野の作家精神なるものは、実は当時の典型的な軍人の精神にはかならず、「兵隊であることをのりこえようとする作家としての不逞な精神があるのではなくて、そういう精神を否定して、求道的に兵隊であることに徹底しよう、そのことをとおして民族の『聖戦』に寄与する文学の誕生がありうる」と確信している思想がある」（一号、八〇頁）といわれる所以である。検閲によって削除された捕虜殺害場面にしても、戦争への疑惑とか抵抗とかを意味するものではなく、火野が理想として描いた「皇軍」のイ

きたはずの火野ら戦争文学の作家たちが、こうした精神状況にのめりこんでいった事情を、安永氏は以上のようにファシズムの上からの誘導・弾圧と家族主義的論理と心理の相互補強作用といった歴史的必然性からだけでなく、また、一部の批評家のように、近代の自我の放棄の結果というふうに裁断するのではなく、そのような形で自我を放棄するに至った事情を、主体の能動性の問題として、さらにそのような形で主体をつき動かしたより深い歴史的必然性の問題としてとらえようとされている。つまり、作家が兵隊をのりこえようとする不逞

であるとき、安永氏は指摘される。しかも、「近代の超克」とはいいながら、国共合作に象徴される中国民族の抵抗に対する理解を全くもたず、盲目的同胞意識と、単純な正邪意識と、民族的優越感と一体になっているようなていものでもしかなかった。そして日本のインテリの近代的自我なるものが、戦争というひとつの極限状況を前にして、主観的にはこのような形で飛躍しか

試みられなかったことの中には、国民を通路としないで、外発的開化にうかされてきた「近代的」知性の敗北という意味があるものであり、そういう意味では、かかる主体の行為自体が深く日本の近代化の特殊なあり方という歴史の必然性に規定されていることが明らかにされるのである。この辺の安永氏の分析は非常にすぐれていると思う。

次に安永氏は以上のような作家の主体のあり方がいかに作品のテーマを規定し、作品の表現形式を規定するか、そしてそのような表現形式が作家の主体の変革を益々不可能にする方向にいかん作用するかといった、いわば内容と形式の弁証法を追求される。

「国民的伝統を通路としないで、それと無媒介に成立」（一号、九三頁）した知性にとつては、戦場におけるがままの兵隊の姿自体が驚異なのであり、それに向つ

て自己を変革する対象として映るのであるから、これらの作家にとつては、文学によって創造すべき新しい人間像と現実の人間像とがとりちがえられることになる。現実にあるがままの兵隊の姿を写すことが創作の目的となる。ここに、この作品が日記形式という記録の方法で表現されざるをえなかった理由がある。もっとも作者自身はこれが忠実な記録ではなく、「文学的処理」をほどこしたものであるというのであるが、その「文学的処理」とは「戦争の本質が把握され、戦争や日本軍隊についてのかれの観念が変革される可能性をほらんだ虚構ではなくて、まったくディテールの加工にすぎない」（一号、九〇—一頁）と安永氏はいわれる。伊藤整は「昨日までは一片の人間私情を操るほかに役立たぬとされてゐた純文学の写生法によらなければ、この戦争の焰のやうな実体を国民に伝えることができなかったのだ」とこの作品のリア

リアイを賞讃するのであるが、それはいわば即実的なりアリティにすぎず、戦争の全貌、本質がそこで表現されているようなりアリティでは決してなく、したがって、作家が創作過程をとおして、自己を変革し、戦争と自己との関係を歴史的制約をこえてとらえなおさせるに至らせるような、そういった意味でのリアリズムの作品ではけっしてなかったと安永氏は批判される。つまりこの作品の表現形式たる記録という形式は、戦闘に埋没して戦争をみうしなう方法だといえる。ここに文学が文学として自立しえなかつた事情があると安永氏は指摘される。ここには文学が文学であるとはどういふ事かといった事柄にかんする安永氏の見解がよく示されている。それは事実即実的によりそつた自然主義的方法、ルポルタージュ的方法を否定して、虚構による現実の再創造というリアリズムの方法を文学が文学としてあるべき方法として主張され

評

論

ている事を意味する。火野を代表とする戦争文学が文学性を喪失して、政治に屈従していったという意味を、こうしたリアリズム論を評価基準としつつ、文学固有の次元で追求されたこと、ここに安永氏の功績のひとつがある。

一一

ところで、「その二」でとりあげられる石川達三の「生きてゐる兵隊」が安永氏によって肯定的に評価されるのは、かかる氏の評価基準からして当然のなりゆきといえよう。「生きてゐる兵隊」も「麦と兵隊」や「土と兵隊」と同じように、インテリ出身兵が兵隊らしい兵隊（この作品では笠原のような）に自己をつくりかえてゆく過程を描いている。しかし、その同じ問題に対する石川のみかたは火野と異なつて否定的である。それは「非人間化することによつ

て、有能で模範的な盲従兵士にむかつて必死に自己をつくりかえていく戦争道具化の過程にはかならない」（二号、五四頁）と安永氏がいわれるように、石川にあっては、知識人としての人間崩壊過程としてとらえられている。石川がこのようなテーマを抱くに至つた動機は、いうまでもなく、昭和十二年十二月下旬から約一カ月間、中央公論社特派員として中国に滞在した時の見聞による衝撃であるが、その衝撃がいかに強かつたかは、帰朝直後、二月一日から二月十二日までの短期間に、昼夜ぶつ通しで、この作品をかいたといわれている所によくうかがわれる。（中央公論社版「日本の文学」石川達三集の解説による）何が石川にそれ程の衝撃を与えたかについて、安永氏はおそらく南京大虐殺の事実を石川は知っていたであろうという事、したがって、日本の兵士が、とくにインテリ出身兵がどうしてそのように平気で人を殺すよう

になるのであろうかといった問題が「目下ノ問題」として彼をとらえたであろうことを、彼の現地での聞きとりのしかた、法廷での証言などから推測されている。こうした「生きてゐる兵隊」のテーマが生れるのであるが、こうしたテーマを作品として表現しようとするとき、どのような構成を必要とするかを、安永氏はさらに追求される。

「石川の描きかたは、現実の虐殺事件そのものをとらえようとはしていない。作品展開の主要部分を南京攻略までの戦線に設定し、その諸戦闘をつうじてくずれていく兵士たちの人間性と、それにともなつて生ずる行動を描き、客観的にはその帰結として南京事件をみる立場にたっている。したがって、かれの南京事件のうけとめかたは、事件の諸場面にたいする反撥的な表現として定着されたのではなく、日本人の間としての敗北にふかぐちのめされたも

の悲哀と憤怒をその基調にもち、そのためにその人間的敗北にいたった経緯をあきらかにしなければおかないという構成と展開をとらざるをえなかったというところにみるべきであろう。その意味で、かれはこの事件に現地で際会したほかのどの作家よりも、深甚の打撃をうけたといえるのではないか。このばあい、かれをもっともつよくとらえていたのは、こういう凄惨な場面を現出した日本人とはなにか、というやうきれない想念ではなかったらうか」(二号、六五頁)。

このように、この作品のテーマと構成のしかたの必然的關係が把握される。こうして、この作品は現地での兵隊たちのあるがままの姿に対する感動から、あるがままの姿を記録の形式で表現するといった火野流の表現形式をどうしてもとることができなくなるのであり、倉田小隊長、近藤一等兵、平尾一等兵といった、それぞれの出自

をもつインテリ兵を設定し、内地にあっては優しい小学教員であり、生命を救うのを天職とする医学徒であり、またロマンチックな新聞社員であった彼らが、戦場の中で、どのようなプロセスを経て、次第々々に自分の知性のハメをひとつひとつ棄て去り、その感覚を鈍磨させ、「敵を軽蔑しているあいだにいつの間にか我とわが命をも軽蔑する気になって行く」(二号、六三頁)いわゆる逞しい兵士につくりかえられてゆくのかを追求するため、虚構を必要とせざるをえなくなる事情を安永氏は論証されている。このように考える時、同じく虐殺場面を描いても、火野と全くちがう意味がそこにあらわれてくるのも当然である。即ち、そこには「そこにいたるまでの人間崩壊の過程が、戦場における生死の竿頭にたつもの心理と行動として、また日本軍隊特有の思考放棄の過程として、そして、とも根本的には、みずから参加している戦

争の意味を不問にふしてしまわねばならぬ状況として、描きだされていることをみのがしてはなるまい」(二号、六二頁)といわれるような意味があるのである。以上のような、この作品のテーマ、構成、部分的形象(虐殺場面)に対する安永氏の統一的な把握は平野謙ら従来の批評家にみられない説得力をもっており、私も同感である。ところで、火野と石川の作品をくらべてこのようにみえてくると、火野も石川も同じ時代に同じような素材をもって作品をかきながら、どうしてこのようにちがってきたかが問題になってくるだろう。火野の近代的知性なるものが国民を通路としない外発的近代化という歴史的な必然に深く規定されていたと説明されていただけに、では石川の場合、それから免れていたのだろうかという疑問が湧いてくる。これに対して、安永氏は石川の現実に対する関心を支えている根底となるものは「国土的危機感と被

害者擁護を根幹とする国民意識とである。

評 論

それが「かれを文学において日本近代化の悲惨な破綻と対決させた」のであり、それが「かれの生活をも律する統一的な人間の原理であった」(二号、七三頁)そして、そういう被害者としての国民につよく共感できる生活と資質にねぎした人間的な思想は、肉体化されない観念や思想とちがって、よいには転向しない強靱な生命力をもつていたのだといわれる。そして、さらに安永氏は、「しかし、その国士的危機感には明治いろいろの国家主義と、かならずしも明確に絶縁しているとはいいきれず、にもかかわらず、いっぽうの被害者擁護の国民意識と微妙にからみあう関係にあるために、この作品でみられるように、戦争そのものへの基本的な立場や思想は明確に形象化されないまま、しかもその戦争のなかにあらわれる非人間的な現象を克明に描写していくという性格をもつことになる」(二

号、六八頁)というふうには、この国士的危機感の性格をより深く規定し、それが作品全体のテーマ、個々の形象とその構成のしかたを根本的に規定している事を明らかにされたのである。同時に、ここで石川の構成のしかたの限界もはっきりしてくるときに、つまり、彼においては、大状況が不動の枠ぐみとして設定され、「追求される人間とその状況との対立までは描かれるけれども、その衝突をおして状況が変革されていくという方向へはむかわず、きまいて人間が状況につぶされていって終結をつげる。したがって、かれの文学方法における虚構とは、不動の枠ぐみのなかで生きる人物たちの創造という限定された意味においていえることである」(二号、六七—八頁)と安永氏は批判されるのである。そして、こうした作品は「事実を依拠する枠ぐみの設定と、そのなかで被害者の人物を創造し、しかも極度に作者の主観の表出を抑

制しながら、人間の敗北への経過が描きだされて終結するために、あたかもその状況を『放任し肯定』しているかのような印象をあたえる」(二号、六八頁)ことになると思われ、この作品でかれが描きだした日本兵の惨虐行為と、そこにいたる必然的経過とは、やはり読者をして、かれの意図をこえて、戦争そのものの本質にまで想到させるリアリティをもっているといわねばならない」(二号、六九頁)と付言する事をもろく忘れてはおられないのだが。

三二

以上、火野と石川を対比しながらすすめてきた安永氏の論述をみて、この論文における安永氏の最判からの重要なモチーフである、文学が文学でなくなるとはどういうことか。従って、逆にいえば文学が文

学固有の次元で文学でありうるには何が必要なのか、といった問題への氏のひとつの解答がはっきり示されているのを知る事ができる。

そのひとつは、作家の主体のあり方が国民を媒介としているか、いないかという事である。外観はスマートで近代的でも、国民を媒介としない自我はもろく崩れ去るという事、逆に、外観は国士的古さをもっていようと、国民と結びついている自我は強靱な生命力をもっているという事、これが安永氏の評価基準のひとつである。しかも安永氏はこれを単なる生き方の問題、倫理の次元の問題にとどめないで、さらに文学固有の次元の問題としてとらえようとする。その場合、事実在即実的によりその記録の形式か、事実の奥にひそむ本質を形の上に表現するための虚構を媒介とする表現形式か、といった問題として提出される。しかもこの場合、歴史的に制約されな

がらも、作者のどのような主体のあり方がどのようなテーマを選びとらせるか、そして、この選びとられたテーマを作品として表現するためには、どのような形式こそがそのテーマの実現に最もふさわしいか、そして、かかる形式は作家の意図を超えてどのような意義を担うにいたるのか、といったふうに、作品を歴史の規定性と作家の造形の特性との交錯の中で出来るだけ把握しようとする努力されている。この点で、この論文は以前の歴史、社会学的方法をこえてい

ると思う。

では、安永氏がたんなる歴史、社会学的方法をこえる視点をどこで獲得されたかといえは、先に要約した氏の評価基準にはつきり示されているように、戦後の国民文学論であると思われる。国民文学論はしばしばその政治主義的側面において清算すべきものとされがちなのであるが、かつて私も論じた事があるように、日本の特殊な近代

化の中で育まれてきた近代的知性なるもの最も根底的な自己批判であり、とくに丸山静氏の理論的業績に代表されるように、文学が文学である事の意味を改めて深く追求し、独特のリアリズム理論を結実させたのであった。虚構性の問題だけならば、戦後多くの批評家たちによって論ぜられ、作家たちも従来の私小説的傾向を克服すべく新しい努力を傾け始めたのであるが、明治以来の近代のあり方の根底的批判、インテリゲンチアの自己変革の問題との結合の中でこの問題を提出したのはやはり国民文学論の大きな功績であった。安永氏は数々の国民文学論の歪曲の清算の議論に惑わされず、その最も大切な理論的成果の上に立つておられるわけであり、そのことによつて、歴史社会学的方法を芸術主義的な外在的批判によってではなく、内在的に超える方向をつかまれたのである。

以上のように、私は安永氏の所説に同感

評

論

するところが多いのであるが、若干気になる点について最後にふれておきたい。ひとは、安永氏の用いられる「国民」ということばがトータルな人間性を回復すべき主体という意味をもつと同時に、伝統的精神構造に強く規定されて、そこから脱却できないでいる戦時下の現実の国民をまさしており、さらにまた「その三」で「民族はなれた一般的、抽象的人間はかれらの意識のほりえなかつた」(三号、九〇頁)といわれる場合の「民族」という言葉とも微妙にかさなりあっていることである。これは国民文学論当時の用語法そのままであり、こうした多分に情緒的性格をもつ国民観念を克服しなければ、国民文学論が本来もっていた大切なモチーフを今日の問題として生かすことはできないのではないかと思うのである。(この問題については、私はかつて「国民文学論をどう考えるか」△「日本文学」一九六五・四月号▽で論じたこ

とがある)。つまり、火野なり石川なりの自我が国民を媒介としていたか、いなかたかが問題とされる場合、火野なり石川の教養、資質の具体的なあり方に即して、それが現実とのふれあいの中でどう変り、どのような機能のしかたをするのかを具体的に追求し、それがリアリズムの成立または崩壊とどうかかわってくるかを説明されねばならなかつたのではないかと思うのである。ここは安永氏の立論の大切なカナメをなしている所だけに、国民文学論を知らない若い世代の人々に納得してもらえないためにも、それが必要ではなかつたかと思うのである。たとえば猪野謙二氏の「漱石」(岩波講座・「日本文学史」所収)やルカーチがバルザックの「農民」やトルストイを論じた、あのような視点と方法を私は念頭に浮べているのである。

次に虚構という概念の問題であるが、これを現象の即実的な記録の方法と対置する

しかたでとらえているだけでは、今日のリアリズムの問題に迫ってゆくには不十分ではないかと思う。というのは、今日におけるリアリズムの作品の問題性は虚構のない即実的記録というような所にはないからである。むしろ、ある意味では虚構過剰であるといってもよい。したがって、虚構という語をリアリズムか否かの指標のように使うのではなく、その作品の構成がどうなのかを具体的に分析するしかたこそが大切だと思ふ。リアリズム文学の構成とリアリズム文学の構成との根本的相違は、前者が現実の深部に働らく歴史的な規定性を表現する手段となつているのに対して、後者は主観の即目的表現の手段にしかなく、ないという点にあると思うのだが、こうした観点からみると、リアリズムの指標として用いられる安永氏の虚構概念には、歴史の規定性をはなれて、やや形式主義的に理解されている面があることに気がつく。

たとえば、安永氏は石川達三の方法についてこう批判されていた。すなわち、石川の方法というのは「状況の枠ぐみが不動のものとして設定され、追求される人間とその状況との対立までは描かれるけれども、その衝突をとおして状況が変革されていくという方向へはむかわず、きまつて人間が状況につぶされていって終結をつける。したがって、かれの文学の方法における虚構とは、不動の枠ぐみのなかで生きる人物たちの創造という限定された意味においていえることである」(二二号、六七―八頁)と。

いたあらゆる組織的力がすべて壊滅させられていた当時において、そのような作品を書き得たら、それはウソになるだろう。そのウソはきつと構成の破綻、筋の不自然な作為としてあらわれざるをえないだろう。私は「生きてゐる兵隊」の結尾の部分など、全体の筋のしめくりとして実に面白いと思っている。それはこういうところである。慰安婦にピストルを暴発させて憲兵隊に捕われた近藤が、自分に対する処罰がどういう形で下されるか、その結果を待つ間に、いつのまにか軍隊から放免されたらまた研究室の生活にもどろろなどと空想し始め、再び出征する以前の一医学徒の気分になるところがある。ところが、やがて、憲兵が呼び出しにきて、「原隊へ帰ってよろし、処分は追って通知があるだろう」と宣告されると、突然、非常な狼狽におちいる。そして、すでに出発した部隊のあとを息を切らして追うのである。「部隊は彼一人のいるといないとまったく無関心で進んでいる。そして彼は部隊をはなれてまるで何の価値もなく、何の力もないのだ。彼は心の底から自信を失い誇りを失なつて、溺れた者のようにただひたむきに原隊に追いつこうとあせり、走った。部隊と一緒に行く、どこまでもついて行く、それよりほかに彼は何事も考えることはできなかった」。ここでの「部隊」はいわば大状況である。近藤は罪を犯すことでかえつてこの大状況から離脱する可能性を与えられ、束の間、その離脱した場所での生活を夢見る。その瞬間だけ、出征前の本来の彼の姿に戻るのである。しかし、それも忽ち現実の前に破られた。部隊をはなれて彼は生きようがない事を愕然と悟る。そして何の誇りも自信も失ない、その部隊に大状況にすがりつこうとする。しかも、その部隊の行先がどこであるか、「誰も知ってはいなかった」のに。ここには戦時下の大状況

なるものと個人との関係が実にアイロニカルに表現されていて、私はおもしろいと思

支部例会での報告をもとにしたものである。

和感を覚えたからであった。

以上二点、紙数の都合で本稿では省略したので、ここにお断わりしておきたい。

評論

現実の歴史的性格に根拠をもっており、それ故にこそすぐれているのだというふうに考えるのである。この点、あれほど歴史性を重視されている安永氏が文学の表現形式を考える場合、その歴史的规定性の問題を、ちょっとした間忘却されて、形式主義的

支部例会の報告では、いわゆる歴史・社会学派といわれる人々の方法的特徴について、近藤忠義氏の『日本文学原論』を手がかりに述べ、文芸理論としてどこに問題があるかを指摘し、安永氏の方法がどの点でそれを超え出ているかを明らかにしようと努めた。

評価に逸脱されたのではないかと思う。がしかし、これは内容と形式の弁証法という最も基本的な問題であり、私たちが常に見据えていなければならない問題ではある。

また、安永氏の方法的核心をなしている日本文学論が、なぜもう一度否定をくぐりぬけてこなければならぬかを、私自身の一九六〇年代体験や丸山静氏の一連の言語

以上、安永氏の御労作に対して妄評を加えてきたが、今後書きつがれてゆかれるであろう諸篇において、これが文字通り妄評であった事を示される事と信ずる。

理論の試みの意義に触れながら述べた。それは文芸学的範疇というものは、やはり歴史的過程の中で形成されるものであるという事を私自身実感したからであり、安永

(一九六八・一二・二四)

△付記△

これは十二月十四日の日本文学協会京都

氏の「国民」概念なり、虚構概念が日本文学論以後の状況の中でも基本的には何ら動揺にさらされなかつたらしいことに少し異